論文：

大学生が抱く高齢者イメージに関する日韓比較
― 多主体間の長寿文化共有の試み ―

畔津　忠博、金　恵媛、吉永　敦征
山口県立大学国際文化学部

Comparison of Korean and Japanese university students' perceptions of elderly people

Tadahiro Azetsu, Hyeweon Kim, Nobuyuki Yoshinaga
Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

要旨：
本研究の目的は、日本と韓国の大学生が高齢者に対して抱いているイメージを考察することである。本稿ではSD法を用いたアンケート調査を行い、大学生の高齢者への印象を測定した。日韓の大学生が抱いている高齢者イメージの種類、そのイメージの形成に影響を及ぼす情報や経験がわかる質問項目を用いた。調査の結果、両国の若者に共通した高齢者イメージとして肯定的なものは「経験が多い」「尊敬できる」「賢明だ」「上品だ」があげられ、否定的なものは「遅い」「暇だ」などが観察された。両国に差異が大きかった項目は「保守的」「閉鎖的」であった。全体的には両国の大学生の高齢者イメージは類似点が多かった。

Abstract:
The purpose of this research is to examine perceptions relating to elderly people amongst university students in Korea and Japan. Students' perceptions were measured using a questionnaire and analyzed using the SD method. The questionnaire was structured to elicit types of perceptions held relating to elderly people and to obtain information regarding stereotypes young people hold about elderly people. In positive terms, both Korean and Japanese university students regard elderly people as “experienced”, “worthy of respect”, “wise”, and “elegant”, however, in negative terms, both groups of students also consider elderly people to be “slow” and “leisured”. Students' perceptions regarding elderly people as “conservative” and “unsociable” showed a significant degree of variation. Overall, it can be seen that university students from both countries have similar perspectives on elderly people.

キーワード: 高齢者イメージ、日韓比較、大学生、SD法
Key words: Images of elderly people, Comparison between Korea and Japan, University students, Semantic Differential method

1　はじめに

NHKの無縁社会プロジェクトが注目された2010年頃、孤立（孤独）死問題が社会的解決課題として取りあげられた。議論のなかで確認されたことは、問題解決方法として、従来のような世代間関係、コミュニティへの回帰は期待しにくく、あるいは目指す解決方向とは異なっており、したがって新たなコミュニティ、ネットワーク形成への模索が求められる、ということであった（金、2014：265-270）。高齢者の社会的孤立問題は、高齢化社会・アパート社会へとダイナミックな社会変動をみせている韓国においては日本以上に深刻な社会問題となっている。

高齢世代と非高齢世代との日常生活における接点が減少傾向にあるうえに、高齢期の長期化、及び両

者の非接触期間の長期化によって高齢者イメージは当事者が関与できない文脈のなかで一方的に形成、再生産されていく可能性が高い。一方、社会の高齢化、平均寿命の延びは紛れもない現実であり、したがって、日韓のほとんどの人々にとって長期のライフステージである高齢期と向き合うことはほぼ避けられない。高齢者イメージを具体的に検討することは現在の高齢世代に対する理解もさることながら、非高齢世代自らの高齢期と向き合う試みといえよう。

高齢者イメージに関する先行研究を概観すると、まず、看護学生や施設実習など高齢者と接点を持つ学生の指導に目的をおく研究が多いことが注目される[1]。研究テーマとしては高齢者イメージの形成・変化要因の解明に比重をおくものがほとんどである。そのため、主な研究内容としては、実習・授業の前後や高齢者施設訪問経験によるイメージの変化（中村・白澤、2015）、祖父母との接触状況や同居経験の有無によるイメージの差異を測るもの（柴田、2015）が多数を占めている。実習や将来の職場での適応などの教育目的の研究が多く、また、高齢社会の今後の担い手とされる小・中学生や大学生などが肯定的な高齢者イメージ、高齢社会ビジョンを描く基礎形成にねらいがあるように見受けられる。

高齢者イメージに関する日韓比較研究（竹田他、1991；鄭他、2000；細江・Kim、2013）はまだ少ないが、日本同様に高齢化が急激に進むなか、高齢者の社会的孤立や貧困が深刻な社会問題となっている韓国の現状からして日韓比較のニーズが高いことは改めて強調するまでもない。工業化社会の到来とともに高齢者の社会的役割の変化、それに伴い儒教規範的な世代間関係の形成・維持が困難であることが指摘されて久しいが（竹田他、1991：406）、ICTリテラシーの世代間格差、デジタルデバイドが目立つ情報化社会における世代間ギャップはさらに広がりをみせている。高齢期生活のQOLの向上や高齢社会の前向きな展望のためには多様な主体間の関係に関する抜本的な見直しが必要であろう。

高齢者との日常的な接点が少ない現状から、高齢者イメージの形成に関わる情報源としてはマスコミの役割が大きいように推測される。また、メディア情報の多くは認知症や介護負担、高速道路での逆走、オレオレ詐欺など問題的局面、長寿への否定的な側面が取り挙げられやすく、一面的な高齢者イメージの形成に影響していることが予想される。

そこで本稿では、日本と韓国の大学生が高齢者についてどのようなイメージを持っているかについてアンケート調査を行った。これにより、日韓の大学生がどのような高齢者イメージを持っているか、そのイメージの形成にはどのような情報、経験知によって老人イメージが形成されるのか分析を試みる。用語としては「高齢者イメージ」ではなく「老人イメージ」を使用した。老人福祉法、老人虐待、老人問題など、老人という言葉は高齢者という言葉より否定的な語感がある印象はぬぐえないが、高齢者ということばからもニュートラルなイメージがもはや薄く（西村、2009：35）、また韓国においては老人という表現が一般的であることから「老人イメージ」を採用した。

2　調査概要

大学生が抱く高齢者イメージがどのようなものかを調査するために、日本の１つの大学と韓国の２つの大学でアンケート調査を行った。アンケートでは、高齢者に対するイメージ、高齢者で思い浮かべる人、高齢者に対する普遍的な考え方、各環境における高齢者の処遇に対する意見を尋ねた。それらイメージを形成してきたと予想される対象者の属性、具体的には、同居経験の有無や高齢者について学んだ経験の有無などを調べ、大学生が抱いている高齢者像を具体的に抽出することを試みた。

質問紙の構成、質問項目ともに堀・大谷（1995）の研究を参考に作成した。堀・大谷の研究は60歳以上と大学生を対象とする老人イメージの収集・分析だが、本研究では大学生が抱く高齢者へのステレオタイプの収集・分析に絞っている。またインターネットによる情報収集が一般的になった現代的事情への考慮、長寿文化の国際比較ができるように項目の一部改変を行った。

調査対象者は、日韓合計で612人である。日本の大学では312名[2]、韓国の大学では、２つの大学でそれぞれ200名[3]、100名[4]で、合計300名[5]から調査協力が得られた。アンケートの実施時期は、3つの大学とも2016年６月である。

調査方法は、それぞれの大学で授業内にアンケート用紙を配布し、15分程度の時間で匿名で回答してもらい、その場で回収した[6]。

1　論文検索サイトCiNiiで「高齢者イメージ」を検索ワードに入れると、総124件がヒットするが、その3分の2に当たる80件余りが看護学生を含む学生の実習前後の高齢者イメージの変化を測定した研究である。同サイトで57件がヒットした「老人イメージ」においても状況は同じである。
2　平均年齢18.41歳、標準偏差0.84歳
3　平均年齢20.86歳、標準偏差3.11歳
4　平均年齢21.54歳、標準偏差1.78歳
5　平均年齢21.09歳、標準偏差2.75歳
6　ただし、100名の調査を実施した韓国の大学では、50名のみ授業内で実施し、残りの50名は授業外（キャンパス内）で個別に配布し、その場で回答、回収した。なお、調査は同じ内容の質問紙を用いて日本語と韓国語でそれぞれ行った。

3　調査結果

3.1. 高齢者に対する一般的なイメージ

まず、大学生が高齢者にどのようなイメージ持っているのかをSD法を用いて調査した。質問内容（部分例）は以下の通りである。

Q1．あなたは「老人」についてどのようなイメージをお持ちですか。以下の項目を見て、あなたの老人イメージに該当するところに○を付けてください。

①非常にそう思う	②まあまあそう思う
③どちらともいえない	④まあまあそう思う
⑤非常にそう思う	

	①	②	③	④	⑤	
1 消極的						積極的
2 尊敬できない						尊敬できる
3 経験が少ない						経験が多い

上記と同様の記載方法で、図１のグラフに示されている通り全部で34項目について回答を求めた。図1はその結果を示したものである。

Q１の結果から両国の上位、下位項目と、両国で差異が大きい項目、有意な差がない項目の平均値を以下にまとめた。

＜日本の上位3項目: 平均値（標準偏差）＞

	日本	韓国
経験が少ない - 経験が多い	4.67 (0.61)	4.35 (0.82)
尊敬できない - 尊敬できる	4.03 (0.82)	3.56 (0.87)
好ましくない - 好ましい	3.59 (0.81)	3.12 (0.77)

＜韓国の上位3項目: 平均値（標準偏差）＞

	日本	韓国
経験が少ない - 経験が多い	4.67 (0.61)	4.35 (0.82)
間抜けだ - 賢明だ	3.44 (0.82)	3.71 (0.88)
尊敬できない - 尊敬できる	4.03 (0.82)	3.56 (0.87)

＜日本の下位3項目: 平均値（標準偏差）＞

	日本	韓国
遅い - 速い	2.12 (0.74)	2.02 (0.67)
頑固だ - 従順だ	2.18 (0.81)	2.42 (0.98)
暇だ - 忙しい	2.18 (0.77)	2.15 (0.84)

＜韓国の下位3項目: 平均値（標準偏差）＞

	日本	韓国
保守的 - 進歩的	2.55 (0.91)	1.84 (0.82)
遅い - 速い	2.12 (0.74)	2.02 (0.67)
暇だ - 忙しい	2.18 (0.77)	2.15 (0.84)

＜両国で差がある項目: 平均値（標準偏差）＞
（0.6以上の差異が認められた項目）

	日本	韓国
保守的 - 進歩的	2.55 (0.91)	1.84 (0.82)
暗い - 明るい	3.51 (0.79)	2.91 (0.81)
閉鎖的 - 開放的	3.13 (0.92)	2.42 (0.82)

＜両国で差がある項目: 平均値（標準偏差）＞
（0.5前後の差異が認められた項目）

	日本	韓国
むなしい - 充実している	3.23 (0.82)	2.74 (0.73)
悲しい - 嬉しい	3.12 (0.70)	2.63 (0.81)
依存的 - 自立的	3.13 (0.97)	2.65 (0.96)

＜両国で差がない項目: 平均値（標準偏差）＞
（t検定の結果、有意水準5%で有意差が認められなかった項目）

	日本	韓国
灰色 - バラ色	2.77 (0.76)	2.65 (0.78)
暇だ - 忙しい	2.18 (0.77)	2.15 (0.84)
受動的 - 能動的	3.05 (0.91)	2.94 (0.97)
否定的 - 肯定的	3.00 (0.89)	2.94 (0.88)
感情的 - 理性的	2.72 (0.92)	2.59 (1.02)
下品だ - 上品だ	3.42 (0.67)	3.38 (0.78)
きたない - きれいだ	3.25 (0.65)	3.18 (0.80)
孤立 - 連帯	2.70 (0.97)	2.66 (0.97)
遅い - 速い	2.12 (0.74)	2.02 (0.67)

日本と韓国で上位と下位の項目については、ともに類似した傾向があることが見て取れる。この中で、両国の大学生はともに高齢者は「経験が多い」と感じているが、これは年齢とともに人間は様々な経験を積んでいくという一般的な認識とも合致している。また、下位３項目のうち両国で共通の「遅い－速い」と「暇だ－忙しい」に関しては有意差もなく、ほぼ認識が一致している。これらのことから高齢者との接点が相対的に少ない大学生の高齢者イメージは、社会通念を反映する傾向があると推測できる。しかしながら、両国の大学生に差が大きく見られた項目が２つあった。１つは「保守的－進歩的」、もう１つは「閉鎖的－開放的」であり、0.7以上の違いが認められた。

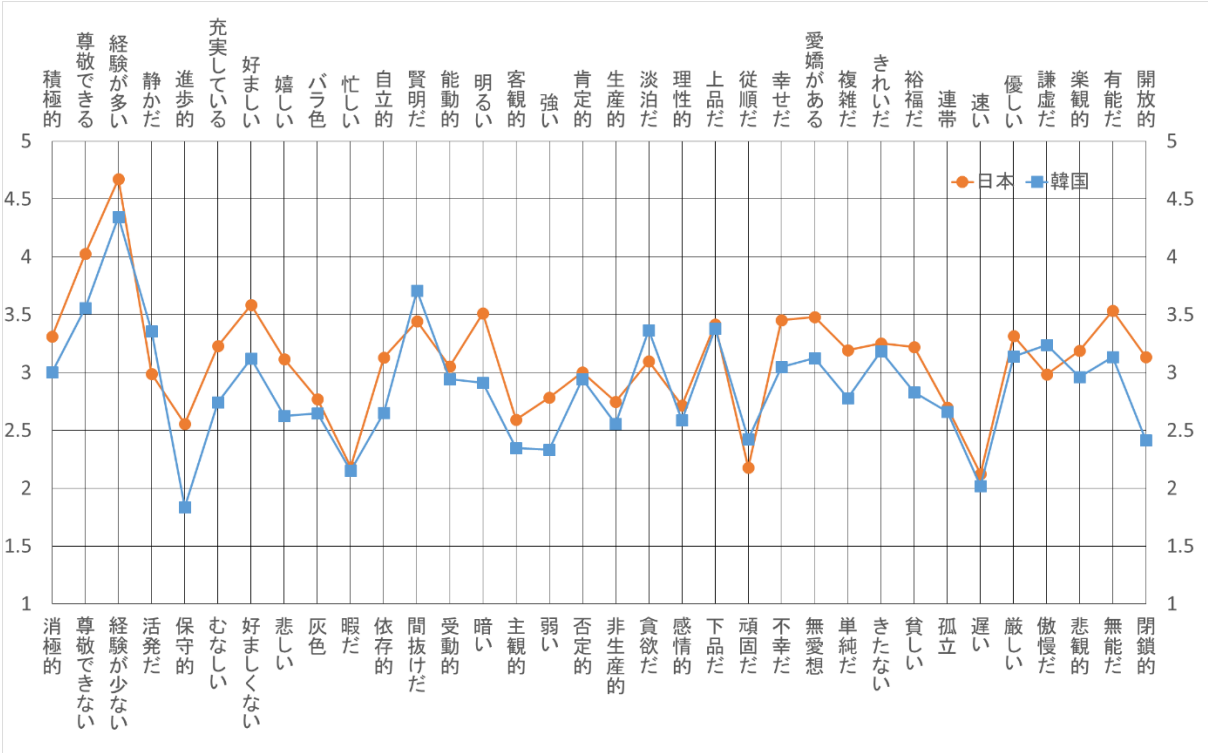

図1. 「あなたは老人についてどのようなイメージをお持ちですか」という質問における結果。それぞれの項目において肯定的なイメージをもっていれば5に、否定的なイメージであれば1に近くなる。例えば、最初の項目においては、5に近くなるほど高齢者に対して積極的で、1に近くなるほど消極的というイメージを持っている。

3.2. 具体的な高齢者像

次に、大学生が思い浮かべる高齢者がどうような人なのかを知るために、以下の質問を行った。

Q2. 老人と聞くとどんな人を思い浮かべますか？該当する番号をすべて書いてください。

①あなたの祖父母 ②近所の隣人 ③ドラマや映画、小説に出てくる老人 ④病院や施設などで会う老人 ⑤地域活動で会う老人 ⑥宗教活動で会う老人 ⑦新聞、TV、雑誌、インターネットのニュースや報道に出る老人 ⑧趣味活動で会う老人 ⑨その他 ⑩思い浮かぶ人はいない。

結果を図2に示す。Q2の結果で両国の上位、下位項目と、両国で差異が大きい項目、有意な差がない項目の割合を以下にまとめた。

<日本の上位3項目: 該当する割合>

	日本	韓国
あなたの祖父母	0.776	0.737
病院や施設などで会う老人	0.654	0.587
近所の隣人	0.551	0.703

<韓国の上位3項目: 該当する割合>

	日本	韓国
あなたの祖父母	0.776	0.737
近所の隣人	0.551	0.703
病院や施設などで会う老人	0.654	0.587

<両国で差がある項目: 該当する割合>
（0.15前後の差異が認められた項目）

	日本	韓国
近所の隣人	0.551	0.703
地域で会う老人	0.529	0.353
宗教活動で会う老人	0.029	0.177

<両国で差がない項目: 該当する割合>
（χ2検定の結果、有意水準5%で有意差が認められなかった項目）[7]

	日本	韓国
あなたの祖父母	0.776	0.737
ドラマや映画、小説に出てくる老人	0.215	0.277
病院や施設などで会う老人	0.654	0.587
趣味活動で会う老人	0.083	0.080
その他	0.048	0.063

両国の大学生がともに「祖父母」を思い浮かべる割合が高く、上位の項目については、両国で類似し

7 「思い浮かぶ人はいない」は該当すると答えた割合が両国とも少なく検定結果には含めていないが、日本が1人、韓国が2人であり、差はないと言える。

ている。日本において二番目に高いのが「病院や施設などで会う老人」であった。そこで、所属する学部で割合の違いを確認したところ、次の通りになった。

看護系学部（93人）	0.656
人文系学部（113人）	0.566

学部間で有意差はなかった（$\chi 2$（1）=1.714, p = 0.19）が、割合に若干の差が認められた。看護系学部の学生は実習などで会う病院の高齢者を思い浮かべたと考えられる。しかしながら、病院への実習の機会がほとんどない人文系学部も半分以上が該当している。これは、大学生をはじめとする若者がもつ高齢者との接点が病院であることを示すものと捉えることが自然であろう。

また、両国間で差が大きい項目として、「地域活動で会う老人」は日本が高く、「近所の隣人」及び「宗教活動で会う老人」は韓国が高くなり、特徴的な結果となった。これには、宗教活動や地域活動などにおける両国のライフスタイルの違いが関係しているように思われる。

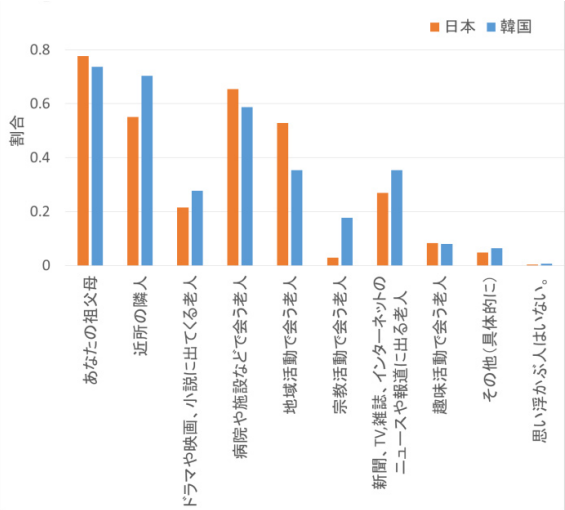

図２．「老人と聞くとどんな人を思い浮かべますか？」という質問における結果。縦軸は割合を表す。

3.3. 高齢者に対する規範意識

次に、大学生が抱いている高齢者に関しての普遍的な考え方について知るために、以下の質問を行った。これらの項目はGallois et al.(1999)による「Filial Piety Scale」を応用したチョン・ミエの尺度(韓国老年学フォーラム編、pp.323-330)を活用した。

Q3. 次の項目についてあなたの普遍的な考えと一致するものに○をつけてください。

①とてもそう思う ②まあまあそう思う ③どちらとも言えない ④あまりそうではない ⑤まったくそうではない

	①	②	③	④	⑤
1通常、私は老人を世話する/世話すると思う					
7通常、若い人たちは老人を世話しなければならない					

上記と同様の記載方法で、図３の結果に示す通り、12項目について質問した。この質問項目では、「私は」と「若い人たちは」と２つの主語を用いており、その違いは、個人からの視点と、社会からの視点を表している。

結果を図3に示す[8]。Q3の結果で両国において上位、下位項目と両国で差異が大きい項目、有意な差がない項目の平均値を以下にまとめた。

＜日本の上位3項目: 平均値（標準偏差）＞

	日本	韓国
通常、私は老人を尊敬する	4.05 (0.82)	3.62 (0.90)
通常、私は老人の言葉を注意深く聞く	3.89 (0.83)	3.75 (0.88)
通常、若い人たちは老人の言葉を注意深く聞かなければならない	3.77 (0.88)	3.67 (0.94)

＜韓国の上位3項目: 平均値（標準偏差）＞

	日本	韓国
通常、私は老人の言葉を注意深く聞く	3.89 (0.83)	3.75 (0.88)
通常、若い人たちは老人の言葉を注意深く聞かなければならない	3.77 (0.88)	3.67 (0.94)
通常、私は老人を尊敬する	4.05 (0.82)	3.62 (0.90)

＜両国で差がある項目: 平均値（標準偏差）＞
（0.5以上の差異が認められた項目）

	日本	韓国
通常、私は老人に財政的な助けをする／すると思う	2.95 (1.07)	3.46 (0.88)
通常、私は老人と持続的に接触する／会う	3.56 (1.07)	2.93 (1.13)

＜両国で差がない項目: 平均値（標準偏差）＞
（t検定の結果、有意水準5%で有意差が認められなかった項目）

	日本	韓国
通常、私は老人を世話する/世話すると思う	3.45 (1.07)	3.58 (0.91)
通常、若い人たちは老人を世話しなければならない	3.63 (0.93)	3.52 (0.96)
通常、若い人たちは老人を財政的に助けなければならない	3.42 (0.99)	3.37 (0.97)
通常、若い人たちは老人の言葉を注意深く聞かなければならない	3.77 (0.88)	3.67 (0.94)
通常、若い人たちは老人を喜ばせるべきだ	3.34 (0.97)	3.27 (0.99)
通常、若い人たちは老人と持続的に接触/会わなければならない	3.54 (0.97)	3.39 (0.98)

8　ここでは、グラフの見やすさを考慮して上記の表とは反対に、3で得点を反転させ5と1、4と2を入れ替えて、値が高いほど「そう思う」傾向が強いようにしている。

両国ともに上位にある項目は、高齢者に対して尊敬すべき、気にかけるべきという心情的なものであった。差がみられた項目に関しては、自分が財政的な支援をすると考える得点が韓国は高くなり、自分は高齢者と持続的に接点をもつと答える得点は日本が高くなった。日本では高齢者と接点はもつが生活は自らが行うべきと考える傾向があり、韓国では財政的な支援がまず必要と考える傾向が見受けられる。

また、差がみられた項目に関して祖父母との同居経験の有無による得点の違いを調べてみた。結果は下記の通りであった。

	同居経験	日本	韓国
通常、私は老人に財政的な助けをする／すると思う	有	3.02 (1.14)	3.60 (0.90)
	無	2.91 (1.00)	3.36 (0.84)
通常、私は老人と持続的に接触する／会う	有	3.81 (1.08)	3.10 (1.18)
	無	3.38 (1.03)	2.82 (1.09)

日本において同居経験のある方が、高齢者との持続的な接点において得点は高くなった。しかし、それ以外においてはあまり違いが見られなかった。

また、有意差が見られなかった6項目の中で5項目は「若い人たちは」が主語で始まる項目であった。このことから、社会からの視点としての質問に対しては、両国の違いは少ない。

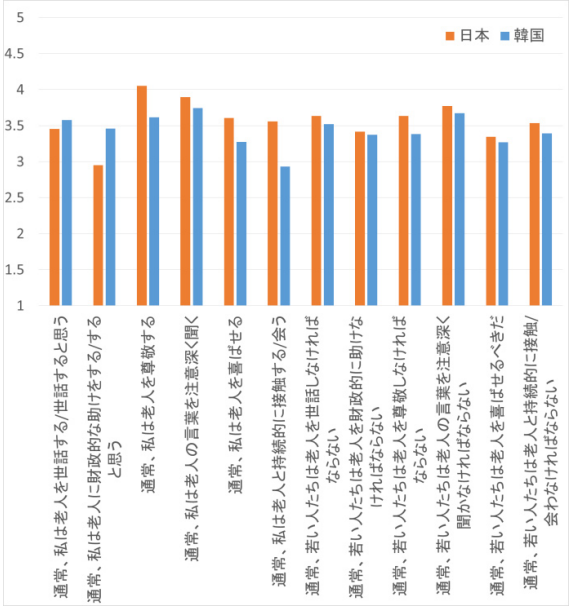

図3.「あなたの普遍的な考えと一致するものは？」という質問項目における結果。それぞれの項目において「とてもそう思う」ほど5に近くなり、「まったくそう思わない」ほど1に近くなる。

さらに、この質問項目では、「私は」と「若い人たちは」と異なる主語で同じ内容を聞いているため、その間の相関係数を求めてみた。結果は下記の通りであった。例えば、表の「世話をする」という項目は、「通常、私は老人を世話する/世話すると思う」と「通常、若い人たちは老人を世話しなければならない」との相関係数の値である。

	日本	韓国
老人を世話する	0.271	0.380
老人に財政的な助けをする	0.333	0.450
老人を尊敬する	0.533	0.694
老人の言葉を注意深く聞く	0.457	0.714
老人を喜ばせる	0.408	0.480
老人と持続的に接触する/会う	0.250	0.356

表の結果より、韓国の大学生の方がすべての項目において相関係数が高くなり、個人の視点と社会の視点で関連が強いことが分かった。また、両国において、老人を尊敬する、老人の言葉を注意深く聞くという項目で相関係数が高くなっており、高齢者は尊敬すべきであるという考えは、個人でも社会でも共有されている。ただし、老人を世話するや老人と持続的に接触するという相関係数は両国とも低めであり、実際に行動を伴う項目になると、個人と社会では役割が違うという意識をもっていることも考えられる。

3.4. 社会における高齢者の位置づけ

次に、各環境における高齢者の処遇についてどのような感想を持っているのかを知るために、以下の質問を行った。

Q4. 一般的に老人についての処遇はどうだと思いますか？各項目についてのあなたの考えを右の①～⑤番の中から選んでください。

①とても尊重されている ②まあまあ尊重されている ③あまり尊重されていない ④まったく尊重されていない ⑤よく分からない

	該当番号
1　家族から	
2　若者世代から	
3　中年世代から	
4　ドラマや映画、小説などの中で	
5　報道(新聞、TV、雑誌、インターネット)の中で	
6　企業から	
7　病院や施設の中で	

結果を図4に示す[9]。Q4の結果から両国の上位、両国で差異が大きい項目、有意な差がない項目の平均値を以下にまとめた。

9　ここでもグラフの見やすさを考慮して、得点を反転させ4と1、3と2を入れ替えて、値が高いほど「尊重されていると思う」傾向が強いようにしている。5は除外した。

＜日本の上位3項目: 平均値（標準偏差）＞

	日本	韓国
病院や施設の中で	3.20 (0.76)	2.79 (0.77)
家族から	3.12 (0.63)	2.96 (0.68)
ドラマや映画、小説などの中で	2.89 (0.71)	2.71 (0.78)

＜韓国の上位3項目: 平均値（標準偏差）＞

	日本	韓国
家族から	3.12 (0.63)	2.96 (0.68)
病院や施設の中で	3.20 (0.76)	2.79 (0.77)
中年世代から	2.78 (0.60)	2.72 (0.63)

＜両国で差がある項目: 平均値（標準偏差）＞
（0.6以上の差異が認められた項目）

	日本	韓国
報道（新聞、TV、雑誌、インターネット）の中で	2.75 (0.74)	2.14 (0.86)

＜両国で差がある項目: 平均値（標準偏差）＞
（0.5前後の差異が認められた項目）

	日本	韓国
企業から	2.36 (0.71)	1.88 (0.86)

＜両国で差がない項目: 平均値（標準偏差）＞
（t検定の結果、有意水準5%で有意差が認められなかった項目）

	日本	韓国
家族から	3.12 (0.63)	2.96 (0.68)
中年世代から	2.78 (0.60)	2.72 (0.63)

日本は病院や施設の中での得点が家族よりも高くなった。Q2の思い浮かべる老人も「病院や施設の中で」が上位あったため、病院や施設で出会う高齢者に対して、その状況も含めよく見ているのかもしれない。韓国は「家族から」が一番高く、「病院や施設の中で」が次であった。家族の中で高齢者が尊重されていることが示唆される。また、両国間で差が大きい項目として、「報道（新聞、TV、雑誌、インターネット）の中で」と「企業から」の２つであった。

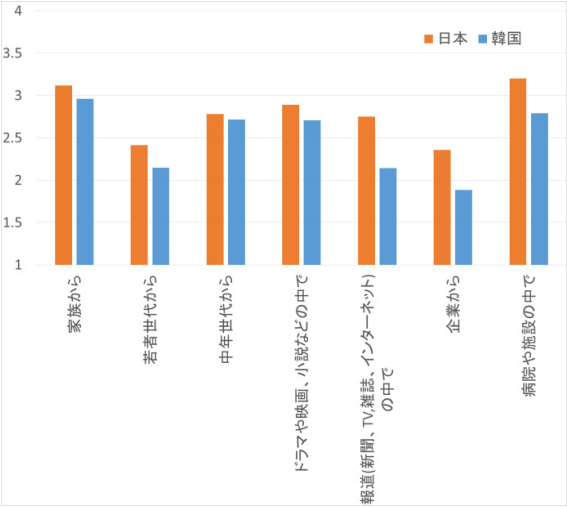

図4.「一般的に老人についての処遇はどうだと思いますか？」という質問における結果。それぞれの項目において「とても尊重されている」と思うほど4に近くなり、「まったく尊重されていない」と思うほど1に近くなる。

4　おわりに

両国の大学生は高齢者に抱くイメージにおいては全般的に共通点が多く、社会通念を反映しているように見受けられた。

また、老人と聞いて思い浮かべる人として家族親族が基本となる点では一致している。ただし、地域活動、宗教活動などでは両国に差異がみられた。

前述のように「老人イメージ」では大きな差異がみられず、高齢者のイメージは接点の有無、種類に大きな影響を受けていないことが指摘できる。このことは、世代間の交流の少なさを示唆しているように思われる。

社会における高齢者の処遇については、おおむね類似傾向がみられるが、企業や報道領域において違いが見られた。また、高齢者に対する規範意識と主観的な意識の間の相関は日本より韓国の方で高くなっている。両国の高齢者イメージの類似点や差異について今後さらなる検討が求められる。

謝辞

本研究の調査にご協力をいただきました韓国と日本の学生の皆様，関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、JSPS科研費（15K01882）の助成を受けて実施した研究の一部を取りまとめたものです。

参考文献

[1]金恵媛、2014、「『百歳時代』ロードマップ―『無縁社会』における超高齢者の『縁活』―」、

韓国日本文化学会、『日本文化学報』60：pp. 263-288
[2]中村正人・白澤政和、2015、「中学生の高齢者イメージ形成プロセスに高齢者施設訪問経験が与える影響」、桜美林大学、『老年学雑誌』5：pp.21-38
[3]柴田益江、2015、「高齢者に対するイメージと行為の発達的変化の研究：小学生・中学生・高校生の高齢者に対する意識の調査から 」『研究紀要』37, 名古屋柳城短期大学：pp.25-32
[4]竹田久美子他、1991、「日・台・韓大学生の老人に対する態度と老後責任意識に関する研究（第3報）：大学生の老人イメージ」、日本家政学会、『日本家政学会誌』42（5）：pp. 405-413
[5]鄭鍾和・金英淑・下垣光他、2000、「青少年の老人に対するイメージの日・韓比較研究：SD法による中学生・高校生の老人イメージ測定」、日本社会福祉学会、『社会福祉学』41（1）：pp. 163-174
[6]細江容子・Kim ju-hyun、2013、「日本・韓国の高齢者イメージ研究の変遷」上越教育大学、『上越教育大学研究紀要』32：pp. 317-330
[7]西村純一・平澤尚孝、2009、「SD法による高齢者イメージの世代差と性差の研究」、東京家政大学人間文化研究所、『人間文化研究所紀要』3：pp.33-42
[8]堀薫夫・大谷英子、1995、「老人イメージに関する調査研究－生涯教育の視点から－」『大阪教育大学生涯教育計画論研究室』、http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/ handle/123456789/4204
[9]韓国老年学フォーラム編、2010、「老年学尺度集」、ナヌムの家（韓国語）